The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『聖アントワーヌの誘惑』の異本3版に見る「宇宙」：宗教と19世紀科学の潮流
Author(s)	柏木, 加代子
Citation	Gallia. 2010, 49, p. 1-12
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/10372
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『聖アントワーヌの誘惑』の異本3版に見る「宇宙」
―― 宗教と19世紀科学の潮流 ――

柏木加代子

『聖アントワーヌの誘惑』（1874年）は、19世紀フランスにおける科学に関する厖大な資料を駆使した点において、『ブヴァールとペキュシェ[1)]』に勝るとも劣らぬ作品である[2)]。

『聖アントワーヌの誘惑』には、共に未刊行の49年版と56年版があり、49年版で記載される「科学 la science」の数は、第1部（3）、第2部（37）、第3部（0）で、56年版では、第1部（1）、第2部（14）、第3部（1）となり、いずれの版も作品中央、第2部に集中している。そして第3部冒頭「宇宙 *Dans les espaces*」では、「傲慢l'Orgueil」の子供としての「科学la Science」は悪魔に変容する。

一方、74年に出版された決定稿においては、la Scienceは第1部（2）、第6部（4）、第7部（2）とバランスよく配置され、la Scienceが4箇所集中している第6部は、49年版、56年版の第3部冒頭「宇宙」に対応する。嘗ての愛弟子イラリオンは自らが「科学」つまり「悪魔」であると明かし、アントワーヌを宇宙に誘う。

> イラリオン：おれの王国は宇宙の大きさで、おれの欲望には限りがない。おれは精神を解放し、諸々の世界の重さを量りながら、憎しみもなく、恐れもなく、憐憫もなく、愛情もなく、神もなしに、つねに歩んでいる。おれは「科学」と呼ばれる。
> アントワーヌ（後ろに飛び退き）：貴様はむしろ... 悪魔だろう！
> イラリオン（眼を彼にすえながら）：お前は悪魔に会いたいのか？[3)] (p.563)

『聖アントワーヌの誘惑』異本3版における「宇宙」場面の改訂過程を分析し、フロベールの「宗教と科学」に関する観念の変遷を考察するのが本稿の目的である。

※本稿は日本学術振興会の平成21年度科学研究費補助金（基盤研究C 課題番号19520249）の交付による研究成果の一部であることを付記する。

1）拙論「『ブヴァールとペキュシェ』第3章に見る19世紀自然科学の潮流」『京都市立芸術大学美術学部研究紀要』53号、2009年、57-66頁参照。

2）「『聖アントワーヌの誘惑』を脱稿した！（中略）これから僕は『聖アントワーヌ』と見合う近代小説に着手する。そしてそれは滑稽なものになるのだ。」（Flaubert, *Correspondance IV*, à George Sand, le 1er juillet 1872, Gallimard, «Bibliothèque de la Pléiade», 1998, p.543.）

3）Flaubert, *Œuvres complètes*, tome I, Seuil, «l'Intégrale», 1980. 本論に記載される『聖アントワーヌの誘惑』異本3版の頁数はすべてこのテクストの翻訳であり、下線箇所については筆者による。

Ⅰ）『聖アントワーヌの誘惑』（49年版から56年版へ）

49年版と56年版第3部冒頭の表記 *Dans les espaces* について、74年版を献詞した親友ルポワットヴァンに関しての書簡に描かれた光景を見てみよう。

> 僕たちは理想の温室に暮らしていて、詩が僕たちのレオミュール式寒暖計で70度の、生存の厄介さを熱くしていた。あれこそは人間だ、あの男！僕は宇宙を横切るあのような旅をしたことは決してなかった。暖炉を離れることなく僕らは遙か遠くまで行ったものだ。部屋の天井は低かったけれども僕らは高く上った。今でも脳裏に残っている午後の思い出の数々、6時間ぶっ通しの語り合い、丘の上の散歩、二人しての倦怠、倦怠、倦怠！すべての思い出は鮮やかに赤く、火事のように僕の後ろで燃え続けているようだ[4]。

つまり、49年版 *Dans les espaces* の場面は、親友と共に語り合った「宇宙を横切る à travers les espaces 」旅というロマンチックな発想によって生まれたのだ。

１）49年版に見るデカルトの影響

一般的な見解では、56年版は49年版の縮約版とされるが、微妙かつ重要な改訂が見られる。*Dans les espaces* の場面は、49年版では「悪魔の角の上で抱えられたアントワーヌ」、56年版では「悪魔の角にしがみついたアントワーヌ」というト書きで始まる。「しがみつく cramponner」に変更されたことに関して、ルロワイエ・ド・シャントピ嬢宛の書簡で、「「科学」にしがみつくようになさい。純粋な科学に。事実を事実として愛しなさい。自然主義者たちがハエを研究するように思想を研究しなさい[5]」と述べていることに注目したい。フロベールが56年版の「悪魔にしがみつく」とほぼ同じ文章で「「科学」にしがみつくようにしなさい。vous cramponner *à la science*」と、「科学」を強調していることは、49年度版のロマンチックな構想から科学的な見地への発想の転換を読み取ることが出来よう。

56年版「宇宙」の場面の構成は、ほぼ49年版の文章削除によるが、唯一、構造的な変更が見られるのは「太陽」に関する疑問、「それなら太陽はすり減るのか？」である。49年版では、アントワーヌは一度閉じた目を自ら開き、「目のようにきらきら輝く天体を眺め、天体から見つめられているように感じる」と主観的な判断をしている。それに対して、56年版では、「さあ目を開けろ！」と悪魔に命じられたアントワーヌは、「球体のうねり」と「音もなく落下する綿雪のような星」を目の当たりにする。科学に関心を示していたフロベールにとって、フランス人物理学者フィゾー（Armand-Hyppolyte-Louis Fizeau, 1818-1896）が1849年に明らかにした地上での光速度測定の影響も考えられる。

49年版の特徴を確認するために、56年版で削除された部分を検証してみよう。宇宙空間を高くのぼり、彗星をまのあたりにしたアントワーヌは、「ああ！美しい

4）*Corr. II,* à Louise Colet, le 31 janvier 1852, Gallimard, «Bibl. de la Pléiade» 1980, p. 41.
5）*Corr. III*, à Leroyer de Chantepie, Croisset, le 8 septembre 1860, Gallimard, «Bibl. de la Pléiade» 1991, p. 110.

彗星たち！[6] 中央で凹んだ火の尾が、海豚のように体を曲げ、通り過ぎ、旋回する…　雪の綿のごとく、星が音もなく落ちる」（p.443）と叫ぶ。彗星は太陽系の天体の一種で、太陽を一焦点とする楕円・双曲線などの二次曲線を描いて転回する。デカルト（1596-1650）の『宇宙論 *Le Monde de René Descartes ou Traité de la Lumière*』（1733年）において詳しく分析されているが、太陽に近づくとガス雲を発生し、明るく輝くコマ（髪）と尾が観測される。

フロベールは、49年版執筆直後の書簡で、「デカルトの時代に生きていたかった[7]」と書いているが、「体を曲げ、通り過ぎ、旋回する」とした「物質と運動」という観点でもデカルトの影響を指摘しなければならない。デカルトは『宇宙論』において、彗星の形について、「これらの彗星に接して何よりも注目すべきことは、その光線の屈折で、それが一般に彗星の周りに尾や髪の毛の形をした若干の光線が現れる原因をなしている[8]」と分析し、「尾や髪の毛の形」や「山形紋ないし火の槍」等のイメージを挿入している。つまり、デカルトは、「物質の唯一の特性を、空間の広がり、つまり延長[9]」に求め、「物質と運動」とを、宇宙の始まりにおいて、神が用意したものだと信じた[10]。

49年版の悪魔の台詞、「さらに遠く、名前のある星の遙か彼方、ずっと向こうに、そこから絶え間なくすべての太陽が流出する輝かしい物質が見えるか？」（p.445）においても、56年版で削除された下線部分には「延長」が強調されていて、デカルトの「物質と運動」による基本的な宇宙解釈を読み取ることができる。

神学の解体と哲学の自立化を意図したデカルトは、この世界が現在あるような変化を見せるためには、物質の外から運動が与えられなければならないとし、世界の素材としての物質を、第一原因である神に帰した。そして物質だけでは世界は動かないから、物質を動かすための運動を考え、これもまた第一原因である神に帰した。神は宇宙の素材である物質を造り、かつ運動を造ってそれに与えたことになる。デカルトは理性の明証性という原理に立ち、思考する精神と物質世界という二元論に基づく形而上学と自然科学を提示して近代合理主義の基礎を築くのである。

しかし49年版『聖アントワーヌの誘惑』では文学的イメージが先行し、「もはや両眼は不十分、わしの精神も太陽の下での氷河のように溶ける」（p.445）と存在の否定につながる詩的な文章が続く。49年版と56年版の相違を確認するために、次の文章を検討してみよう。

6）「惑星はしたがって絶えず同じ中心の周りを回るであろう。一方、彗星は空から空へと移る。ティコ・ブラーエTycho-Brahéは彗星が月よりも遙か彼方まで行くと宣言した。デカルトは、彗星を惑星よりもより遠くに設定した。彼にとっては、彗星はシステムを変えて星から星へと行くのである。」«*Le Monde de René Descartes ou Traité de la Lumière*», in *Œuvres philosophiques de Descartes*, tome I, Garnier, 1972, p. 367 (note marginale 2).

7）*Corr. II*, *op. cit.*, à Louise Colet, le 4 septembre 1852, p.152.

8）*Œuvres de Descartes* publiées par Charles Adam et Paul Tannery, Léopold Cerf, 1909, pp.112-115.

9）村上陽一郎『宇宙像の変遷』講談社学術文庫、2000年、124-128頁参照。

10）*Œuvres de Descartes*, p.34.

> 「一者」しかない！「一者」しかない！だから、そうなんだ、わしは神の一部なのだ。わしの心は彼に対する限りない愛で一杯だ。だから、中にいて、膨らみ、そこで旋回しているのは彼なのだ。わしの体もわしの精神ももはや存在しない。わしの体は、すべての精神の本質精神のように、物質全体の物質からできている。わしの魂はすべての魂！不滅、延長、無限、わしはこれらすべてをもっている。わしはこれなのだ！わしは「実質」であると感じる！わしは「思惟」なのだ。(p.446)

56年版で完全に削除された下線部分は、感情的な「限りない愛」「一杯」「膨らむ」「旋回する」「永遠」など、49年版独特のロマン主義的で主観的な「物質の膨張、運動」を表現する文言である。更に割愛された部分が「心」に関する項目であることから、「身体に対する心のいかなる優位も認めなかった」哲学者スピノザ（Baruch Spinoza, 1632-1677）の影響が56年版では顕著になったと見ることができよう。

2）スピノザを意識した56年版

フロベールは、ルポワットヴァンの死（1848年4月3日）を知らせたデュカン宛4月7日付書簡で既にスピノザに言及しているが、56年版脱稿直後のルロワイエ・ド・シャントピ嬢宛の書簡では、スピノザを高く評価し、しきりに読書を勧めている。

> スピノザ（とても偉大な男だ、彼は）に関していえば、ブーランヴィリエによる彼の伝記を入手するように努めたまえ。レプシックのラテン語版に入っている。エミール・セッセが『エチカ』を訳していると思う。（中略）スピノザを読まなければならない。彼を無神論者と批難する者たちは、愚か者だ。ゲーテは、「心の動揺を感じるとき、『エチカ』を読み直す」といった。おそらくゲーテと同様、この偉大な読み物によって、心が鎮められることがあるだろう。私は十年前、この世で一番好きだった男、アルフレッド・ルポワットヴァンを失った。臨終の床で、彼はスピノザを読んで夜を過ごした[11]。

スピノザは、デカルトの影響下で、精神と物質のあらゆる存在を唯一の実体である神の様態とする徹底した一元論、汎神論に立ち、それを幾何学的演繹体系によって展開し、ライプニッツと並んで17世紀を代表する形而上学者である。フロベールは、74年版に着手する直前、サンド宛て書簡で「近頃は、うんざりさせる神学に関するものを読みましたが、そこにプルタルコスとスピノザをちょっとまじえたのです[12]」と書いて、双方が『エチカ』を世に残した二人の哲学者をあげた。

74年版第6部「宇宙」の準備段階で、フロベールはサンドへの書簡（1872年の

11）*Corr. II*, *op. cit.*, à Leroyer de Chantepie, le 4 novembre 1857, p. 774.
12）*Corr. IV*, *op. cit.*, à George Sand, le 2 juillet 1870, p. 203.

復活祭）の中で『エチカ』に言及し[13]、また晩年には、「すべて、全体の一面しか決して見ない、無知、いかさま師、愚か者たち、僕は（生涯で 3 度目に）スピノザのすべてを読んだ。この「無神論者」は僕にとっては、最も信仰深い「人間」であった。なぜなら彼は「神」しか受け入れなかったのだから[14]」と、「無神論者」で神しか受け入れなかったスピノザを称賛した。スピノザにおいては、

> いっさいの特殊や個体は普遍的全体的な神においてあり、その様態 modi にほかならず、したがってそれ自身において独立に存在する存在でなく、すべてが普遍的法則によって因果的に連結され、規定される[15]。

フロベールが愛読した『エチカ[16]』第 2 部（精神の本質および起源について）の定理Propositionを具体的に見てみよう。定理46 (p.179) では「あらゆる観念が含んでいる神の永遠で無限な本質は十全で完全である」とし、定理47 (p.181) では「人間精神は神の永遠で無限な本質の妥当な認識を有する」とする。つまり、神の中に人間が生じる。人間は実体ではなく、したがって何ものかの様態である。

定理49 (p.185) では「精神には、観念が観念である限りにおいて含む以外のいかなる意志作用も、即ちいかなる肯定あるいは否定も存在しない」とし、定理49備考Scolieには以下のような説明がある。

> しかしこれらの偏見を取り払うのに苦労はしないだろう。ただ延長の概念を全然含まない思惟の本性に注意して、その上で観念（なぜなら観念は思惟の様態であるから）が物のイメージや言語に存しないことを明瞭に理解するのであれば。というのは、言語及びイメージの本質は単に身体的運動で組織されているもので、それらは思惟の概念を全く包まない。（p.189）

つまり、観念は観念である限りにおいて肯定ないし否定を包含するものとし、自由意志と解されるイメージ、言語は実は単なる身体の運動である。無限知性の中で身体の観念になっている神の思考がその局所で知覚を生じていて、それに十全なものもあれば非十全なものもあるというだけである。精神はメンタルな能力なしで考える。我我の内で知覚しているのは神である。スピノザは、したがって我我の持つ明晰判明な観念が真である保証を、デカルトのようにその観念の外に求める必要はないとする 。

13）「これら二人の偉人（カントとヘーゲル）は、私を呆然とさせる。そして彼らから離れると、貪欲に旧友で 3 倍も偉大なスピノザをむさぼる。何という偉人！『エチカ』は何と素晴らしい書物だ！私は、例の『聖アントワーヌ』のため、少し天文学も読んだ。」（*Corr.IV*, *op. cit.*, à George Sand, le 31 mars 1872, pp.504-505.）

14）*Corr. V*, à Edma Roger des Genettes, le 13 mars 1879, Gallimad, «Bibl. de la Pléiade», 2007, pp. 579-580.

15）下村寅之助「スピノザ　ライプニッツ」『世界の名著30』1997年、中央公論社、41頁。

16）『エチカ』引用文頁は、Spinoza, *Éthique*, présenté, traduit et commenté par Bernard Pautrat, Seuil, 2007年版による。

また、『エチカ』第５部（知性の能力あるいは人間の自由について）の定理30では、「我我の精神は、自分自身や身体を、永遠の相のもと（sub aeternitatis specie）に認識する限り、必然的に神の認識を有し、また自らが神の中に在り、神を通して考えられる（per Deum concipi）ことを知る」(p.523)。つまり、人間は神への知的愛に達し、神が自己自身を認識して満足する無限な愛に参与することで最高の満足を得ることができるとスピノザは想定する。

フロベールがスピノザを評価したのは、自己の意識をもっとも確実な存在としたデカルトが物質の唯一の特性を、空間の広がり、つまり延長に求め、「物質と運動」とを、宇宙の始まりにおいて、神が用意したものだと信じ、二種の無限を区別したのに対し、スピノザは、神はすべての物質の中に存し、物質はすべて神の中に存すると考えたからである。スピノザの「神すなわち自然 Deus sive Natura」にあっては、神の中に人間が生じる。フロベールは49年版のデカルト的な文言を割愛することで、56年版の主旨をスピノザ哲学へと軌道修正したことになる。

Ⅱ）『聖アントワーヌの誘惑』74年版

１）56年版から74年版へ

悪魔と宇宙に飛立つ直前、つまり49年版と56年版の各第３部冒頭 *Dans les espaces* 場面への繋ぎとなるアントワーヌの台詞はどのように改訂されたのか。

> わしが吠えて、鳴いて、わめくことが必要だ。ヒレや鼻があればなあ？わしは他者の中で生きたい（中略）あらゆる形態に合わせ、あらゆる原子の中に入り、物質の中を循環し、それが考えていることを知るために自分自身が物質になりたい。(p.504)

56年版で巧妙に削除された49年版の下線箇所は、「魚のヒレや象の鼻があればなあ？」といった運動を外部器官に求めて、「あらゆる形態に合わせて原子に入る」、デカルトの「物質と運動」を思い起こさせる。「物質になりたい」にはスピノザの思想の影響が見られる。

一方、74年版では、これらの文言は以下のように修正され、『聖アントワーヌの誘惑』の大団円を飾ることになる。

> わしは飛んで、泳いで、吠えて、鳴いて、わめきたい。翼をもちたい。(中略)あらゆる形態に潜み、あらゆる原子の中に入り、物質の奥底まで下り、―物質でありたい！（p.571）

「飛んで」「泳いで」「翼」の挿入は、第６部「宇宙遊泳」を彷彿とさせる。「あらゆる形態に潜み、あらゆる原子の中に入る」は、形に身をすくめて、原子に浸透する、運動というよりは物質内部の様態を表している。推敲を重ねて達した文言「物質でありたい！」は、「精神と物質のあらゆる存在を、唯一の実体である神の

様態とする、徹底した一元論」であるスピノザの思想をより鮮明に打ち出している。ジル・ドゥルーズは、『スピノザ　実践の哲学』の「無神論者スピノザ」で、

> 『エチカ』のすべての道は内在にある。しかし内在は、無意識そのもの、無意識の克服である。エチカの「喜び」は、思弁的「肯定」と相関である[17]。

と「内在」の重要性を指摘した。大団円を待つまでもなく、第 6 部におけるアントワーヌの台詞「それでは、物質は神の一部分なのだろうか？」（pp.564-565）は、フロベールにおけるスピノザ哲学の受容を夙に看破している。

さて *Dans les espaces* 結末について、49 年版・56 年版を先ず比較してみると、下線が施された部分が、おのおの改訂あるいは削除されている。

> 49 年版 *: Le Diable <u>tend</u> les bras <u>pour l'enlacer,</u> Antoine avance les siens <u>vers lui.</u> Dans <u>le</u> geste <u>qu'il fait, sa main</u>, frôlant sa robe, heurte son chapelet ; il pousse un cri et tombe <u>à terre</u>.* (pp. 446-447)
> 56 年版 *: Le Diable <u>ouvre</u> les bras, Antoine avance les siens. <u>Mais</u>, dans <u>ce</u> geste, sa main frôlant sa robe heurte son chapelet. Il pousse un cri et tombe.* (p.506)

49 年版においては、アントワーヌを抱きしめるため、意図的に手をさしのべる運動を行う悪魔、悪魔の方に手を差し出すアントワーヌの動作など、「運動」の役割が鮮明に描かれていた。56 年版においては、「地面」「地上」を表す *à terre* が削除され、アントワーヌの行動にも悪魔の動作にも「運動」が巧妙に削り取られた。これら文章の修練は、フロベール若年のロマン主義文学との乖離を示している。しかし「物質 la matière」の誘惑に屈して宇宙に投げ出された、49 年版、56 年版のいずれも、アントワーヌが悪魔、つまり虚無の脅威から身をかわすには、ローマ教会の念珠、「ロザリオ son chapelet」の助けを要したことは注目に値する。

それに対して、74 年版では、アントワーヌは自力で悪魔を追っ払うことにより第 6 部「宇宙」の結末を迎える。

> 世界は事物の絶え間ない流れであって、逆に仮象が真実すべてでもないかぎり、幻想こそが唯一の現実だろう。しかしお前は見えると確信しているのか？生きていることさえ確かなのか？おそらく何もないだろう！
> （悪魔はアントワーヌを捉えた。そして、その腕の先で彼をつかんで、口を開けて彼を見つめ、彼をまさにむさぼり食おうとする。）
> だから、俺を崇拝しろ！そして、おまえが神と名付けている幽霊を呪え！
> （アントワーヌは希望の最後の動作によって目を上げる。悪魔は彼を見捨てる。）(p.565)

17）Gilles Deleuze, *Spinoza Philosophie pratique*, Editions de Minuit, 1981, p.43.

悪魔は、世界が「物質なき運動」、仮象で、「幻想が唯一の現実 l'illusion la seule réalité」であると告げる。しかし神の様態としての「物質であること」を受容したアントワーヌにロザリオはもはや必要ではない。フーコーが、「聖アントワーヌは、物質の言語なき運動となることにより〈永遠の書〉に打ち勝った[18]」と述べたように、外部からの運動である言葉という媒体によってではなく、「物質」そのものの動きとなることで〈永遠の書〉に打ち勝つ。

2）宗教と19世紀自然科学の動向

フロベールが19世紀自然科学の動向に関心を懐いていたことは、1849年から51年にかけてデュ・カンと旅したオリエントでの記録写真に読み取ることができる。ちなみに天体写真が発見されたのは1840年頃である。初稿『聖アントワーヌの誘惑』が創作された1849年頃には、フランスにおいて天文学に関する基礎知識が確立されつつあり、ル・ヴェリエ（Le Verrier, 1811-1877）たちが、天王星の運動の揺らぎから未発見の惑星の位置を計算し、それに基づきドイツ人ガレ（Galle, 1812-1910）が1849年に海王星を発見し、同年、前述したようにフィゾーが光の速度を秒速約30万kmと測定したことなど、天文学が飛躍的な発展を遂げた。

49年版と56年版には、太陽や星座などの天文学に関しての科学的データーは含まれないが、74年版では天文学の知識も採取している。宇宙に放り投げられたアントワーヌの台詞「毎晩、太陽が沈んでいく山々を見つけよう」に対する悪魔の応答「けっして太陽は沈まぬ！」（p.564）について、以下のようにピタゴラス学派の哲学者、フィロラオスによる一般的知識「宇宙の中心にあるのは地球ではなく、中心火と呼ばれ、地球はその周りを回転する」なども挿入している。

> プラトンのアンティクトヌス[19]も、フィロラオスの中心光源体も、アリストテレスの天球も、また水晶の円天井の上に大噴水のあるユダヤ人の7つの天界も見えないだろう！（p.564）

また、月に関しても「ここは昔、魂の棲むところだった。お人好しピタゴラスは、ここをまさにすばらしい花鳥で飾った」（p.564）と解説している。ピタゴラスの名は数字と結びついて考えられることが多いが、彼の哲学は、宇宙と人間の全体に及ぶ宗教的とも言える体系である。人間の魂は、本来神的な父子の存在であるにも拘わらず、無知の罰によって、この世の肉体という墓に閉じ込まれ、死んでいる。知（ソフィア）は、この死から魂を救い出し、本来の姿に立ち戻る事を可能にしてくれる[20]。つまり、人間の体験の世界、現実の世界が、実は「虚」であって「死」であり、そこを抜け出したところに「実」の世界があるとする。74年版の草稿を見てみると、フロベールは新プラトン派の哲学者、プロチノスの文言「我我は、我

18）La préface de Michel Foucault, «La Bibliothèque Fantastique», in *La Tentation de saint Antoine*, Livre de poche, 1971, pp.32-33.

19）«Planète imaginaire qui, dans le système de Pytagore et celui de Platon tournerait autour du soleil du côté opposé à la terre.», Flaubert, *Œuvres complètes*, tome I, Seuil, «l'Intégrale», 1980, p.564.

20）村上陽一郎『宇宙像の変遷』講談社学術文庫、42-43頁参照。

我の魂を介して、普遍的魂の本質 l'essence de l'âme universelle に合致した本質を有している[21)]」をメモしていて、それは本文の「そして最後の火花よりももっとむこう、お前が夜の闇しか認めないあの深淵の彼方に、別の太陽がいくつも旋回し、そのむこうにはまた別の、さらにまた別のと、際限なく…」（pp.564-565）に読み取ることができよう。

新プラトン主義とは、万物の本源である「一者」からあらゆる実在が階層的に流出し、より低い階層はその上位の物の模像であり、より複雑、不完全である。また万物は「観照」によって、一者へ階層的に回帰することを欲し、この上下 2 方向への運動が実在を構成するとした。人間もこの運動によって感覚的なものを脱して一者に向い、これと直接的合一、すなわち「脱我」の境に達することを求むべきであるとした。これらの思想は形成期のキリスト教に取り入れられたのである。新プラトン主義的な最初の一者と神の世界創造とを読み重ねるとき、その「一者とは光」であり、より具体的には太陽であることになる、その太陽こそは、熱や光や愛を、激しく「流出」しているのである。

そこで74年版において注目したいのは、以下の悪魔の台詞である。

> 星は、お互いに引きつけ合うと同時に、遠ざけあっている。一つ一つの星の動きは、他の星たちによって生じ、そして他の星にも寄与している。―補助の手段なしに、法則の力、秩序の唯一の効力によるのだ。（p.564）

「補助の手段なしに Sans le moyen d'un auxiliaire」は、デカルトの二元論の「運動」否定にも通じ、また「秩序の唯一の効力 la seule vertu de l'ordre」は、新プラトン主義の「一者」から想定されるスピノザの物質一元論を示唆している。

科学的な視座で読めば、天の川が「天頂にところどころに孔のある厖大な帯のように、伸び広がっている。その輝きの裂け目の中に闇の空間が続いている」は、天文学見地からも正しく、『ブヴァールとペキュシェ』においても再度著述される。つまり、円盤状に集まった多数の星である銀河系を、太陽の位置（円盤の縁に近いところ）から見ると、淡い帯のように見え、空が十分暗いところでは、天の川の中央を走る、暗黒星雲が集中する帯、「闇の空間」が観察できるのである。

さらに、未来からの回顧的メッセージとして、近代天文学にも言及している。

> （彼は一目で、南十字星と大熊座、山猫座と人馬座、かじき座の星雲、オリオン星座の六曜星、四衛星を従えた木星、巨大な土星の三重の環をみとめる！すべての遊星、のちに人間が発見することになるあらゆる星だ！彼の目はそれらの光で満たされ、彼の考えはそれらの距離の計算にかかろう。やがて彼は頭をたれる。）(p.564)

21）Plotin, *Néoplatonisme I,* p. 319, cité in *La Tentation de saint Antoine,* Club de l'Honnête Homme, tome 4, 1972, p.310.

神に力の無限性を信じるキリスト教の立場から眺め直してみても、無限の宇宙空間、その中に拡がる無限の天体たちが、整然たる力学的秩序の中にある、と言うことは決してそぐわないものではない。しかし、啓蒙期以降、少なくとも科学の世界からキリスト教的な神学の理念は、表面上消去され、異なった局面を迎えていたことを考慮に入れておかねばならない。

３）ルナンと科学信仰

同世代のキリスト者として、フロベールが興味を抱いて文通したのは哲学者ルナン（Ernest Renan[22]，1823-1892）であった。1857年刊行の『宗教史研究 *Etudes d'histoire religieuse*[23]』をはじめ、1863年には『イエス伝 *Vie de Jésus*』をフロベールは読破し、1873年には代表作 『反キリスト *L'Antéchrist* 』の出版を待ちわびた。ルナンは、ドイツ哲学の影響を受け、22歳で信仰に懐疑的となり、化学者マルスラン・ベルトロ（Marcelin Berthelot, 1827-1907）の影響を受けた『科学の未来―1848年の諸思想― *L'Avenir de la science – Pensées de 1848*』（1849年作、出版はフロベール死後の1890年）の著者として知られる。『イエス伝』において、イエスを一人の人間と見なし、「比類なき人」と呼んで、時代背景や地理的条件と共に実証的に描き出した。フロベールは、ルナンよりむしろ、イエスの生涯が神話による形成にほかならないと批判したドイツ人神学者シュトラウス（David Friedrich Strauss[24]，1808-1874）の「科学的なキリスト論は、歴史人物としてのキリストを超越しなければならない[25]」を評価していたが、にも拘わらず『哲学的な会話と断章 *Dialogues et fragments philosophiques*』（1876年）を読んだフロベールは「科学の将来」を謳ったルナンを称賛した。

> カトリック教徒の感情を害し、実証主義者たちが眉をひそめる可能性はあります。私の場合は、あなたから「教化されたんです」！それになんという言葉遣いなのでしょう。格調が高くて楽しい！観念を引きずりながらも、たて続けに幾度も読み返してしまうような頁（133-134頁のように）があるのです。奇蹟の不可能性、（英雄の、偉人の）犠牲の必要性、「自然」のマキアベリスムと「科学」の将来。これらはあなたのようには誰も扱わなかった点で、今後は議論の余地がないものだと思われます。「民主主義的平等」に抗議されたことに感謝します。それは世界の死滅要素だと私には思われるのです[26]。

22）«Et les imbéciles déclament contre Voltaire qui est un spiritualiste! et contre Renan qui est chrétien. Ô Bêtise ! ô infini !» (*Corr.V*, *op. cit.*, à Edma Roger des Genettes, le 8 octobre 1879, p.721.)

23）*Corr.II*, *op. cit.*, à Mademoiselle Leroyer de Chantepie, le 12 décembre 1857, p.785.フロベールは、司教団から有罪判決を受けた *Terre et Ciel* (1854) の作者でサンシモン主義者Jean Reynaudについて繰り返し語る彼女に、むしろルナンの読書を勧めている。

24）«Avec tout cela je lis sainte Thérèse et le docteur Strauss. J'ai des envies poignantes d'aller vivre hors de la France.» (*Corr.I*, à Louise Colet, le 10 août 1847, Gallimard, «Bibl. de la Pléiade», 1973, p.466.)

25）D.F. Strauss, *Vie de Jésus ou examen critique de son histoire*, traduite par Littré, Paris, Ladrange, 1839-1840, 2 vol.. cf. Laudyce Rétat, «Flaubert, Renan et l'interrogation des religions», in *Flaubert 3*, Minard, 1988.

26）*Corr.V, op. cit.*, à Ernest Renan, le 22 mai 1876, p.40.

晩年1879年の書簡に、「ルナンはポケットに神さまを持たない、彼はね、だから僕は彼が好きだ[27]」と書いたフロベール。「ポケットに神さまを持たない」、つまり、神の加護を求めることなく、宗教をカトリック教義の埒外で科学の対象とし、奇蹟や超自然を非科学的伝説として排除した、哲学者ルナンの近代合理主義的な世界観を評価した。

しかし、74年版へ改訂するにあたって、果たしてルナンの影響があったのだろうか。フロベールは『イエス伝』について、サンドへの書簡で、「女性的で聖職者的な要因があまりに強すぎる」とした上で、ルナンの「ニュアンス、暗雲、折衷 en nuances, en nuages, en compromis」に富んだ性格に注目している。

> もし彼が選挙で二つの領海の間を航行したとして、そのことで彼は彼の性格に従っただけであって、その性格はニュアンス、暗雲、折衷に富んでいる。だからこの世の事柄に加わりたいという彼の欲望は私にはあまりにグロテスクに思われる。社会的活動、それは彼のような筋金入りの男には零落であるが、彼にはできない明晰さが要求される[28]。

フロベールはルナンの政治・宗教に対する科学的かつ心情的な姿勢を「暗雲」に比較し、「彼にはできない明晰さが要求される」と弾劾した。

そこで、第6部冒頭のト書きに注目してみよう。「（悪魔はアントワーヌの下で、遊泳者のように体をのばして、飛んでいく。－大きく開かれたその二枚の翼は、悪魔のからだ全体を隠して、雲のように見える）」（p.563）とある。49年版、56年版と異なって、悪魔の翼が「雲 un nuage」にたとえられる。雲はその発生から消滅まで、その時時の気象状態に左右されるため、雲の観察によって、上空の気象状態をある程度知ることができるので、その観察は古くから重要とされている。第6部冒頭に「雲」が巧妙に取り入れられたのは、「悪魔の雲」と一心同体となったアントワーヌの心の動揺を表現していると理解できる。

なお74年版草稿において、フロベールは「（確実の不可能性）人間の魂は、凸面鏡のように、物体をゆがめる[29]」と記し、本文には、

> しかし、お前の精神に媒介されてはじめて、万象がお前の前にたどり着くのだ。凸面鏡のように、お前の精神は物象を歪める。そして、その正確さを立証するすべての方法はお前にはない。（p.565）

27）«Il n'a pas le bon Dieu dans sa poche, celui-là, et voilà pourquoi je l'aime.» (*Corr.V*, *op. cit.*, à Edma Roger des Genettes, le 8 novembre 1879, p.736.）「好奇心で何事も見逃すまいとする、目ざとい」という慣用表現 «n'avoir pas les yeux dans sa poche» があるが、当時の一連の宗教活動、教皇の態度などに対するフロベールが表明した嫌悪感と併せて考察する必要がある。

28）*Corr.IV, op. cit.*, à George Sand, le 5 juillet 1869, p.64.

29）Appendice de *La Tentation de saint Antoine*, Club de l'Honnête Homme, tome 4, p.307 (Folio 97 recto).

と、科学台頭の世紀における、媒体としての人間の知覚に警鐘を鳴らした。

結論として

ジョルジュ・サンドへの政治を語った書簡の中で、フロベールは台頭する科学の役割を以下のように位置づけている。

> もはや政府の最良の形を夢見るのではなく、すべて優劣がないのですから、「科学の権威を高める」ことが問題なのです。これが最大の急務です。他は否応なく続いていくでしょう。純粋に知的な人間は、世界のすべての聖ヴァンサン・ド・ポールを合わせたより、人類に大きな貢献をしたのです！そして「政治」は「科学」に依存しない限り果てしのない愚行でしょう。一国の政府は学士院の一部門、しかも「最下等の部門」であるべきなのです[30]。

74年版決定稿で、南十字星をはじめとする星座を同定したアントワーヌは、「それらすべての目的は何だろう？[31]」と唱える。この文言は『ブヴァールとペキュシェ』においても繰り返されるのだが、ルナンの『哲学的な会話と断章』の序文にも見られ、「目的に関しての神秘的秩序」として、「世界の目的は理性が統治すること[32]」とある。つまり、ルナンは「芸術と芸術家は、科学と科学者の利益のために消えるであろう」という考えであったが、フロベールが切望したのは、政治も然り、「科学的な芸術であって、科学による芸術摂取ではない[33]」のである。

『聖アントワーヌの誘惑』全３版「宇宙」の度重なる改訂が物語るもの、それは、作家フロベールの精神の記録である。ロマン主義の影響あらわで、饒舌、多感な49年版に見るデカルトの二元論、推敲を重ねた56年版のスピノザの一元論への傾倒、そして、74年版への改訂は、1870年７月19日にはプロシアと開戦、８月末にスダンで第２帝政が崩壊する、政治的にも波瀾万丈の時期であった。1871年４月にフロベールはプロシアに占領されていたクロワッセに戻り、執筆を続ける。科学がめざましい発展を遂げる19世紀後半にあって、同時代人であるルナンの「科学による神学の解体」を反面教師として「教化された」フロベール。「宇宙 *Dans les espaces*」場面を、74年版において第６部として改編することよって、フロベールは神話に依拠した啓蒙期以前の宗教秩序を、ルナンとは異なった「科学的な芸術」として刷新したといえよう。

（京都市立芸術大学教授）

30）*Corr.IV*, *op. cit.*, à George Sand, Croisset, le 5 juillet 1869, p.65.

31）78年版の «Quel est le but de tout cela ? – Il n'y a pas de but !»に類似した表現が、«Irai-je toujours ? où donc est le but ?» (48年版）«Irai-je incessamment ? où donc est le but ?» (56年版）にも見られる。また *Bouvard et Pécuchet* 第３章の天文学を扱った箇所にもほぼ同じ文章«Quel est le but de tout cela ? – Peut-être qu'il n'y a pas de but ?» (Livre de poche classique, 1999, p.124) がある。

32）«Dialogues et Fragments philosophiques» in *Œuvres complètes de Ernest Renan* (édition de Henriette Psichari), tome I, Calmann-Lévy, 1947, p.555.

33）Voir «Notes et variantes», in *Corr. V*, *op. cit.*, p.1133.